

データ紹介

～ Cedep・ベネッセ教育総合研究所合同調査より～

現代の「チーム育児」における園の役割とは

乳幼児期の 社会情動的発達を支える 「チーム育児」

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（以下、Cedep）とベネッセ教育総合研究所は、乳幼児期の子どもから調査を開始する長期縦断研究「乳幼児の生活と育ちに関する調査」を、2017年より継続的に実施しています。今回は、3歳児期までのデータをもとに、アタッチメントや保護者の養育行動が子どもの「社会情動的発達」にどのような影響を与えているかを見ながら、母親、父親、そして保育者が連携した「チーム育児」のあり方について、Cedepセンター長の遠藤利彦先生にお話をうかがいます。

*本記事は2021年2月上旬に取材しました。



遠藤利彦先生

(えんどう・としひこ)

東京大学大学院教育学研究科教授。同研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）センター長。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得後退学。博士（心理学）。専門は、発達心理学・感情心理学。著書に、『赤ちゃんの発達とアタッチメントー乳児保育で大切にしたいこと』（ひとなる書房）など。

保護者の育児へのかかわり方が変わろうとする中、 園に求められる「チーム育児」の視点

環境の改善は進んでいるが 父親の育児参画は十分とはいえない

私たちが行っている縦断調査は、同一の母親・父親に継続して調査を行い、子どもの生活と育ちや保護者の子育てに対する意識などの実態と変化を見ていくものです。ここでは、特に「チーム育児」「社会情動的発達」という2つの観点から、園の先生方が保護者を理解するために役立つデータと、これからの保育のあり方について考えていく際の材料となるようなデータをご紹介します。

まず、子育てにかかわる保護者の働き方について、4つのデータをご紹介します。**図1**は、在宅勤務によるテレワーク制度の有無と利用状況について聞いたものです。コロナ禍で注目されたテレワークですが、1歳児期、つまり2018年の調査に

比べると、制度そのものも利用する保護者も少しずつ広がっています。**図2**は、職場が育児に理解があるかを聞いています。「定時で帰りやすい雰囲気がある」という父親は、2017年（0歳児期）の調査（図表略）から約15ポイント増加しています。職場環境の変化を受けて、父親の平日の子育て時間も緩やかではありますが、増えています（**図3**）。

「イクメン」という言葉が市民権を得て、それぞれの業界で働き方改革が叫ばれている中、家庭を取り巻く環境は少しずつ育児をしやすい方向に変わっていることが、データからもわかります。しかし現実には、母親の就労などの社会参画が進む一方で、父親の育児参加はまだ不十分といわざるをえません。父親の平日の子育て時間は確かに微増傾向ではあるものの、約4割の父親は「1時間未満」です（**図3**）。子育てにおける母親の役割

は依然として大きく、半数以上の家庭で母親が子育ての8割以上を担当しているという状態も見えます(図4)。

「チーム育児」の一員として 高まる園への期待

そうした状況で、園の保育に対する保護者の満足度は、特に保育の評価、子どもの様子、保育者との関係において非常に高く(P.18 図5)、また、子育てで園の先生を頼りにしている割合も親族と同等程度に高くなっています(P.19 図6)。多くの保護者が園の先生方を信頼し、その信頼に先生方が十分に応えていることを、私はみなさんに知っていただきたいと思います。

では、父親の育児への参画が十分とはいえない中、園にはどのようなあり方が求められるのでしょうか。ここでご紹介したいのが「チーム育児」という考え方です。そもそも、人間の子どもは未熟な状態で生まれるため、親の養育の負担が大きく、古来、子育ては、母親・父親だけでなく祖母や子どもの兄・姉、加えて血縁関係のない地域の人たちもサポーターとするような集団共同型でした。国や文化によって違いはありますが、日本においても、家族や親族、地域がチームとなって子どもを育てる集団共同型子育てが行われてきたのです。

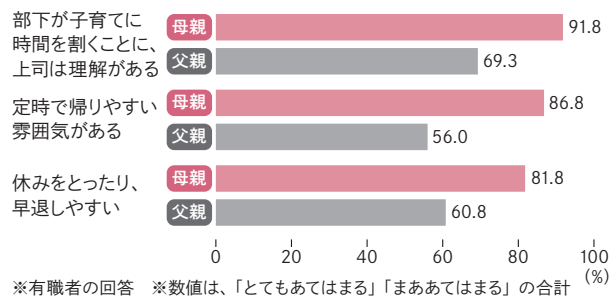
変化が現れ始めたのは1950年代半ばの高度経済成長期からです。父親は働き手、母親は専業主婦として役割が分かれていきました。また、地域と

図1 在宅勤務によるテレワークの制度 (%)

	1歳児期	3歳児期	(制度があるか)	制度は	制度はあ	制度はあ	無答不明
			わからない	ない	るが、利用したことはない	り、利用したことがある	
母親	17.5	13.5	71.9	60.4	4.7	4.9	0.9
	4.7	6.2	13.8	19.5	0.5		
父親	14.1	8.8	66.1	44.1	16.1	30.9	1.1
	16.1	0.1					

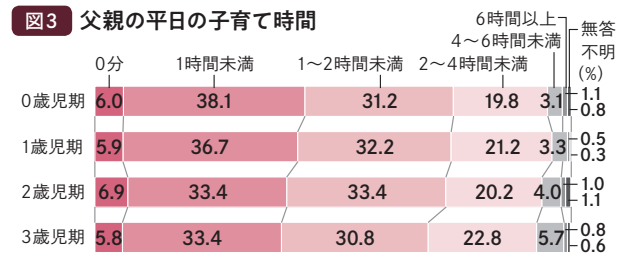
※有職者の回答

図2 職場の様子(3歳児期)



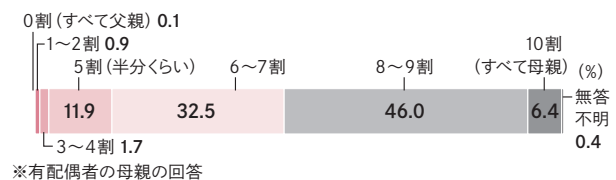
※有職者の回答 ※数値は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計 (%)

図3 父親の平日の子育て時間



※「6時間以上」は「6~10時間未満」「10~15時間未満」「15時間以上」の合計

図4 母親の子育て分担(3歳児期)



※有配偶者の母親の回答

「乳幼児の生活と育ちに関する調査 2017-2020」調査概要

- 調査の実施者** 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター(Cedep) ベネッセ教育総合研究所
- 調査の目的** 子どもの生活や保護者の子育ての様子を複数年にわたって調査し、それらが子どもの成長・発達とともにどのように変化するかを明らかにする。それにより、よりよい子育てのあり方や家庭でのかわり方について検討することを目的とする
- 調査内容** 子どもの気質や生活、子どもの発達、親のwell-being、親の養

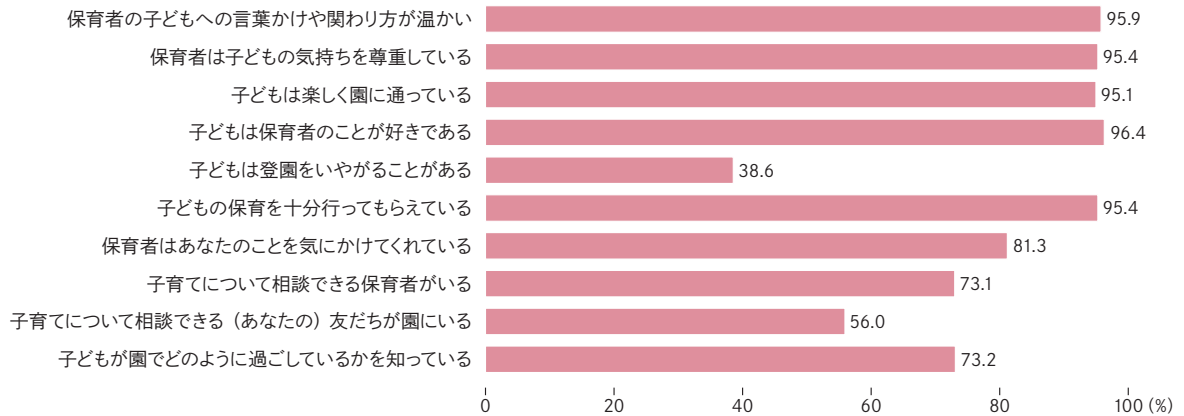
- 育行動や生活、働き方、夫婦関係など
- 調査対象者** 2016年4月2日~2017年4月1日生まれの子どもをもつ家庭3,205世帯(調査モニター)から開始。2020年は2,245世帯を対象に実施
- 実施期間** 2017年9月~10月(子どもの年齢:0歳6か月~1歳5か月)から毎年9月~10月に実施。2020年の調査で4回目
- 調査方法** 郵送調査

調査の内容を
詳しく知りたい方は
こちらから!

ベネッセ教育総合研究所ウェブサイト
東京大学 Cedep・ベネッセ教育総合研究所 共同研究
「乳幼児の生活と育ちに関する調査」(乳幼児パネル調査)
<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5290>



図5 保育について（3歳児期）



※就園者の回答 ※母親の回答 ※数値は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計

の結びつきが弱くなり核家族化が進む中で、子育てを担う主体も母親へと偏っていきました。このように、母親中心の子育ては近年、急速に根づいたものです。やがて男女雇用機会均等法など社会の枠組みの整備は進んでいきますが、人々の意識の底にある「子どもは母親が育てるもの」という固定観念は払しょくしきれていないのが現状です。特に、幼少期からそうした価値観の中で育った管理職世代に、その傾向が強いように感じます。

このように見ていくと、共働き世帯が増えつつある中で、家庭だけで子育てを担うのは難しいと

いう状況が、保護者の園に対する期待を高めている面もあるかもしれません。しかし、私は、園の役割が「母親や父親の補完」という消極的なものにとどまらなないと考えます。人間が古くから行ってきた「チーム育児」は、家庭内での母親・父親・兄・姉、親族、さらには子どもを取り巻くさまざまな人たちの参画によって成立するものですが、そのメリットとして、子どもが多様な人とかかわり、家庭以外の複数の集団に身を置きながら、成長していけることがあるからです。ですから、園の先生方には「チーム育児」の一員として、家庭とは

Column 父親の育児参画を阻む「ゲートキーピング」を解消するために、園に期待される役割

パートナーが家事や育児を手伝おうとしたときに、「あなたはやると邪魔になるから手伝わないで」と拒否する行動のことを「ゲートキーピング」といいます。日本では、母親が父親のかかわりをゲートキーピングするケースが多く見られます。ゲートキーピングされた状態は、父親の子育てに向かう気持ちを阻害することが、今回の調査でもわかっています*。

なぜ、母親はゲートキーピングをしてしまうのでしょうか。要因の1つに、父親のスキルが十分でないことがあるようです。共働きで家事や育児に割ける時間が少ない中では、母親は、スキルのない父親の参加を、「チーム育児」のメンバーとして受け入れることができません。ですから、ゲートキーピングの解消には、父親の育児に関するスキルの向上が必要です。

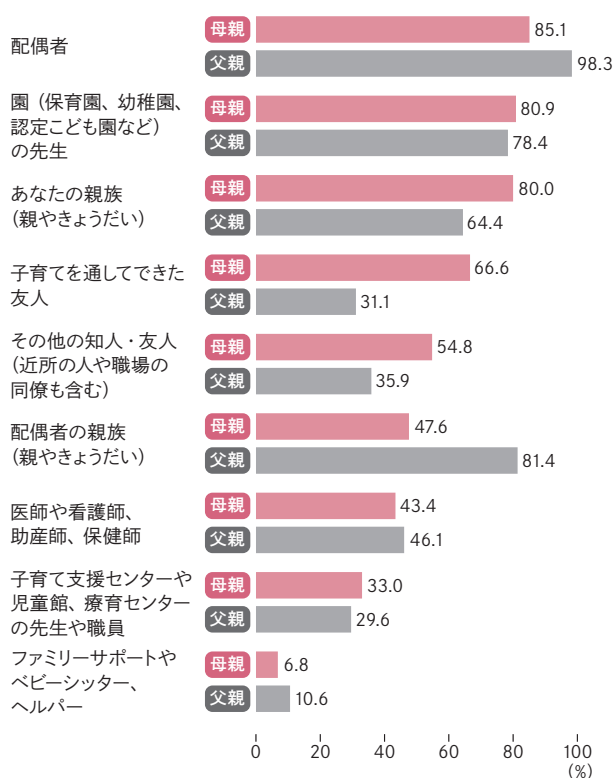
日々、保育に携わり、いわば育児のプロフェッショナルでもある園には、父親の育児スキル向上のためにできることがたくさんあります。例えば、子どもと接する中で子どもの育ちを理解できるようにするために、読み聞かせを体験しても

らうということも挙げられます。コロナ禍で保護者が園に足を運びにくい状況では、園の先生が読み聞かせをしている動画を公開してもよいでしょう。先生方が何気なくしていることがスキル向上の教材になるでしょうし、園の教育資産としても蓄積できると考えます。もう1つのポイントになるのは、できるだけ父親の得意分野のスキル向上を支える、ということです。「チーム育児」のメンバーがバランスよく役割を分担できるようにサポートしていきましょう。

今回の調査では、妊娠中からコミュニケーションができていく夫婦は、ゲートキーピングの状態になりにくく、協動的な育児を進めやすいという結果が出ています。子どもが生まれる前から子育てに関する会話をすることで、父親の育児スキル獲得への意識が高まるのかもしれませんが、園が行うプレパパ・プレママ教室なども、若い世代の育児スキル獲得を支えることで、人々の意識の底にある固定観念を払拭する一助となる可能性があります。

*父親が母親のかかわりをゲートキーピングする場合もある。しかし、今回の調査では日本の現状を考えて、母親から父親へのゲートキーピングに焦点をあてて取り上げている。

図6 子育てで頼りにしている存在（3歳児期）



※数値は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計

違う園という場、保護者とは違う保育者という立場で、園の子ども同士のかかわりを生かしながら、子どもの成長を支えていただきたいと思います。

そして、「チーム育児」を通して子どもに育みたい力の1つが「社会情動的発達」（非認知スキル、学びに向かう力などともいいます）です（図7）。社会情動的発達は、人間関係や感情面の賢さにかかわる力で、自分を大切にし、感情をコントロールして自分をよくしていこうとする「自己」にかかわる力と、人の気持ちを理解し、社会のルールを守りながら人と協働する「社会性」にかかわる力という2つの力から成ります。

図7 子どもの社会情動的発達



社会情動的発達を支えるため 「チーム育児」の一員として保育者に求められること

社会でよりよく生きる力を育む アタッチメント

社会情動的発達は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい『10の姿』」と同様、社会の中でよりよい人生を歩いて行く上で必要な力であり、人生を通じて学び続けていくための力です。そして、社会情動的発達を支える際の土台となるのが「アタッチメント」です。アタッチメントは、子どもの社会情動的発達を支える上で、また、「チーム育児」における保育者のあり方を考える上で重要です。

アタッチメントを理解する際に注意したいのは、アタッチメントはスキンシップとは別物だということです。アタッチメントは、子どもが不安や恐怖といったマイナスの感情を抱いたときに、保護

者や保育者など信頼できる人との関係を通して「もう大丈夫」と安心感を得ることです。子どものマイナスの感情を立て直し、安心感を与える大人は、子どもにとって「避難所」ともいえる存在です。

安心感を得た子どもは、1人で冒険や探索を楽しむようになります。その際、大人は、子どもの失敗を先回りして防いだり、後追いをして処理したりはせず、子どもがそこから元気よく飛び出していける「基地」のように見守ります。こうして、子どもにとって「避難所」と「基地」の機能を果たすのがアタッチメントです（P.20 図8）。

大人が避難所として子どものマイナスの感情を受け止めることで、子どもは自分は愛される価値のある存在だと自覚します。これは、社会情動的発達の「自己」にかかわる力の土台となります。

また、大人が基地として子どもを離れたところから見守ることで、子どもは自発的な遊びに没頭し、1人でいられる力を身につけていきます。そして、「助けて」と言えば人は助けてくれる、いつも自分は見守られているという他者への信頼感は、社会情動的発達の「社会性」にかかわる力の土台となります。こうして、アタッチメントの形成が、子どもの社会情動的発達の土台を育むのです。

保育者に求められる 避難所と基地のあり方とは

安心感を与え、冒険や探索を見守るという意味では、保護者も保育者も果たす役割は同じです。しかし、「チーム育児」を行う上では、アタッチメントも、家庭とは異なる園ならではの視点で、子どもたちにもたらしていく必要があります。

家庭では保護者と子どもという二者関係でのアタッチメントとなり、一方、園では集団の中でのアタッチメントとなります。集団という場合は、家庭にはありません。そして、子どもは、集団の中で社会性にかかわる多くの要素を身につけていきます。園の先生方には、子ども同士の関係性に目を向けて、集団の相互作用の中で社会性にかかわ

図8 「避難所」と「基地」の機能を果たすアタッチメント



子どもが転んだときに、「痛かったね」と声をかけることもアタッチメントを支える行動の1つです。また、遊びに没頭しながらも子どもが大人の実在を確認するように振り返るときに視線を合わせることで、子どもに安心感を与えることができます。(遠藤先生)

る力を育んでいくことが求められているのです。

自分を無条件に受け入れてくれる大人と出会うことは、子どもが成長する上でとても重要です。園には、家庭でのアタッチメントが不十分な子どももいるかもしれませんが、園の先生方はその役割を十分に果たすことができますし、子どもを取り巻く大人として先生方がアタッチメントを行っていくことも、「チーム育児」の成果だと考えます。

保護者の養育スタイルが 社会情動的発達に与える影響

今回の調査では、家庭のしつけ、つまり養育スタイルが子どもの社会情動的発達に影響を及ぼし

図9 幼児期における4つの養育スタイル

温かい 応答性

例：子どもが泣いたり喜んだりしているときは、同じ気持ちになって寄り添う／時間があるときは、子どもと一緒に遊ぶようにしている など

攻撃性

例：子どもに自分のストレスや怒りをぶつけてしまうことがある／子どもにイライラして、攻撃的に接することがある など

許容的で 甘い養育

例：子どもが何か間違っていることをしても、怒ることなく許す／子どもが同じ問題を起こしても、怒ったり怒らなったりする など

統制

例：子どもにできないことがあったら、できるようにするまで何度もやらせている／子どもが決まりを破ったときは、次からは守るように何度も言い聞かせる など

図10 子どもの社会情動的発達を支える養育スタイルとアタッチメント(3歳児期)

母親	父親
温かい応答性 +	温かい応答性
攻撃性 -	攻撃性
許容的で甘い養育 -	許容的で甘い養育 -
統制 +	統制
アタッチメント +	アタッチメント +

※「+」は社会情動的発達を促進する関係性を、「-」は抑制する関係性を表す

ているかについても調べています。まず、幼児期の保護者の養育スタイルを「温かい応答性」「攻撃性」「許容的で甘い養育」「統制」の4つに分類しました（図9）。そして、保護者の養育スタイルとアタッチメントが子どもの社会情動的発達にどのように関連しているかを分析したところ、母親の「温かい応答性」と「統制」と「アタッチメント」が促進する方向に、「攻撃性」と「許容的で甘い養育」が抑制する方向に関連していました。父親では、「アタッチメント」が促進する方向に、「許容的で甘い養育」が抑制する方向に関連していました（図10）。

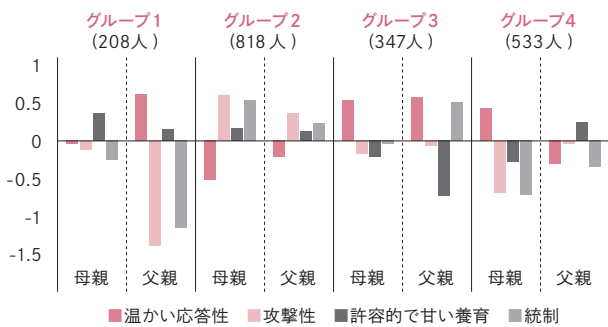
さらに、父親と母親の養育スタイルの組み合わせについても分析しました（図11）。すると、社会情動的発達に関する得点が高い傾向にあるのは、「温かい応答性」を父親と母親の両方が維持した上

で、父親が「統制」を行ったグループ3だということもわかりました。

保護者のアタッチメントは子どもにとっての避難所や基地となりますが、それは優しい養育スタイルだけで担える役割ではありません。「温かい応答性」をベースに、悪いことは悪いと毅然とした態度をとり、秩序をもたらし存在として子どもに接することが、子どもの成長を促し、社会情動的発達を支えることへとつながっていくのだと思います（図12）。

もちろん、「統制」を発揮するのは、父親ではなく、母親でもよいでしょう。大切なのは、「温かい応答性」を父親と母親がともに維持していることで、その上で、父親と母親がチームとして得意な役割を担えばよいのです。

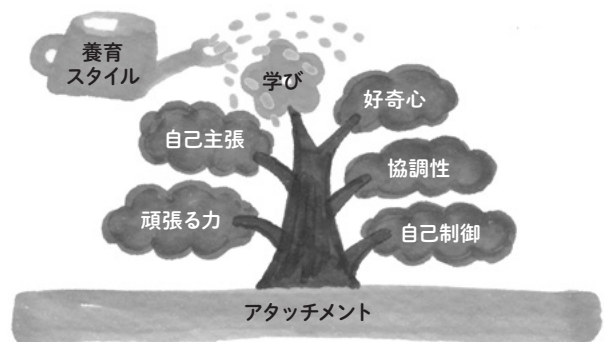
図11 養育スタイルの組み合わせ（3歳児期）



パートナー同士の養育スタイルの方向性（高低）

- グループ1 父親の「温かい応答性」が高い
- グループ2 母親と父親の「温かい応答性」が低い
- グループ3 母親と父親の「温かい応答性」が高い
父親の「統制」が母親より高い
- グループ4 母親の「温かい応答性」が高い
父親の「許容的で甘い養育」が高い

図12 子どもの社会情動的発達を支えるもの



アタッチメントは、子どもに社会情動的発達を根づかせるための土壌です。そして、水やりなどの養育スタイルにより、子どもの社会情動的発達は支えられ、伸びていきます。（遠藤先生）

園の先生方へ

園の先生方が「チーム育児」という視点をもつことで、保護者にかける具体的な言葉や見守る姿勢は、おのずと変わってくるはずですが、また、先生方の子どもたちへの援助も、集団生活を通じた社会性にかかわる力の育成という観点に立てば、今後もいろいろな工夫ができるでしょう。

そして、先生方が「子育ては、みんなで力を合わせて行うもの」という信念をもって子どもたちと接することで、子どもたちは先生方の言動を通して、「男だから・女だから、こうあるべき」といった古い価値観にとらわれない自由な生き方を学ぶはずですが、園の先生方が「チーム育児」の視点をもって保護者、そして、子どもと接することは、子どもたちが形づくる新しい社会という未来を切り開くことにつながるのだと思います。